

人権に関わる差別について

学校法人月江寺学園富士学苑中学校 二年 三井 愛唯

これまで私が生きてきた中で、「人権」という言葉を真剣に考えたことは、正直なかった。これは、ある意味でとても幸せなことだと思う。「人権」とくれば、そこには「問題」という言葉が付いてくる。性的マイノリティーと呼ばれる方、障害を抱えた方、外国人労働者の方などへの差別は、時には命を脅かされる事件に発展するほど、深刻で根深い問題だ。私が自分の人権に対して、問題を抱えたことが一度もないというのは、とてもありがたいことだ。

こんな私でも、最近「差別」というものを身近に感じて考えさせられた出来事があった。コロナウイルスの蔓延だ。私の住んでいる地域は、田舎町なので、コロナウイルスが入ってくるのが都会よりも数ヶ月遅かった。しかし、連日のニュースで伝えられるウイルスの危険性や、感染のしやすさから、日に日に警戒心だけが高まっていた。そして、みんな自分が地域第一号となってしまうことを怖がっていた。不幸にも蔓延初期にかかってしまった人達の中には、周囲からの圧力で何日も外出できなかつたり、ひどい時には家に石を投げられたりしたと噂がたった。

買い物に行くと、感染を逃れて、都会から田舎の別荘に逃げてくる「コロナ疎開」の人達をよく見かけた。車のナンバーが都会の地名だった。「迷惑だよな。」「持ち込まないで欲しいよね。」そんな言葉をあちこちで耳にした。私は、トゲのあるその言葉に違和感を感じつつ、やっぱり自分が第一号になるのだけは絶対嫌だった。「正しく恐れて」とニュースで言われていたけれど、感染蔓延地域から来たかもしれない人達を、どこまで恐れていいのかわからなかった。県外ナンバーの車から降りてきたその女性は、私が少し距離を取ったことに気が付いて、傷ついたらどうか。私のしたことは差別的だったかもしれない。後味の悪さが残った。

私は第一号を免れ、何度目かの流行の波に乗って感染した。家族からは厳重に隔離されたが、周囲の人もかなり罹っていたので、差別的な扱いを受けたと感じたことはなかった。「差別」とはいったいなんなのだろうか、とその時ふと考えた。

私が思ったのは、「差別」とは、「差」がある人達と「別れる」ということだ。人間は多数派を「普通」として捉え、普通な自分に安心する。そして、少数派

に対して「差」を感じ、「自分たちとは違うものとして隔てよう、別れよう」とするのではないだろうか。コロナ罹患者が少なかった時には、罹患者を隔て、罹患者が多数派になるにしたがって、「差」を感じなくなり、「別れる」必要がなくなったのだ。

先日ラジオで、古代スパルタの戦士について興味深い話をしていた。スパルタでは、最強の戦士を育てるため、幼いころから男子に寮生活を強いていた。男子しかいない環境で育つので、恋愛も当然男子同士で、同性愛が「普通」だったのだそうだ。一緒に戦う好きな人を守るというのがモチベーションになって、戦士たちは自らをどんどん鍛えていったので、同性愛はむしろ推奨されていた。スパルタの戦士たちがタイムスリップしてきて、LGBTへの差別が社会問題になっている現代をみたら、『随分不自由な時代だな』と言うだろう。」といていた。

このように、歴史的に見ても、「普通」はころころ変わる。私が経験したコロナ禍の3年間だけでも、「普通」の概念は、大きく変わっていった。

そろそろ、多数派＝普通＝正しいという等式を根本的に変えなければならない。多数派が正しいとか、普通でなければおかしいとか、その考え方を疑っていくことが、多様性を認める社会を実現する第一歩だろう。多数派にいることに安心感や優越感を覚えているうちは、「差別」は消えていかない。「差」を感じて「楽しむ」、「差楽」という言葉を作って辞書に載せたいくらいだ。スパルタの戦士たちに、「やっぱり現代社会は自由で素晴らしい。」と褒めてもらえる世の中になっていくよう、柔軟な考えを持って、未来に臨みたい。